



special feature
経済学部卒業生
座談会



econ. no.051

Hokkai-Gakuen University Faculty of Economics
2025 冬・春号

特集

経済学部卒業生座談会

社会人の今、学生時代を振り返って

～卒業生が語るゼミでの学び、体験、社会で生きたこと～

社会人として活躍している先輩たちも、かつては学生。頑張ったり悩んだり、めいっぱい楽しんだりしながら学生時代を過ごしました。先輩たちはどんなことを学び、なにが今の力になっているのでしょうか。5人の先輩たちに、社会人になってから振り返って気付いたことや、後輩に伝えたいことを語っていただきました。

[2024年12月11日に実施]

大学はやっぱりゼミが楽しい!

司会 皆さんは卒業して5年以上経っていますが、どんな学生でしたか?



大貝 健二
地域経済学科教授

小野 私は拓殖大学北海道短期大学（深川市）から3年次に編入しました。ゼミに入るまでは、朝起きられず1限の授業に出られないなど、あまり真面目な学生ではなかったです（笑）。

木村 自分は隣の併設校から推薦で入りました。授業には真面目に出ていましたが、とくに目的もなく、面白みのない学生だったと思います。でも、2年生でゼミに入ってから「大学って楽しいな」と思うようになりました。



木村 拓貴さん
大貝ゼミ
地域経済学科 2019年卒
教員

大館 僕は、入学当初は自分から積極的に動くという感じの学生ではなかったですね。でもゼミに入ってから、「誰かがやらなくてはならないなら自分がやろうかな」とゼミ長になりました。

石井 私編入です。札幌商工会議所付属専門学校から、編入試験を受けて3年次に入りました。専門学校からの編入なので、包括認定60単位のスタートでした。残りの単位を2年間で取り切るという地獄のような授業スケジュールをこなしました。当時は恵庭在住で通学に時間がかかりましたが、週6で学校に来ていました。とくに3年生のときは就活もしながらだったので、けっこうしんどかったです。ゼミは、板垣暁先生の計らいで2年生のゼミにも参加させてもらうなど、周りの人に助けてもらい

ながら卒業しました。みんなに必死について行ったという感じでしたね。



石井 由起乃さん
板垣ゼミ
経済学科 2016年卒
食品業

佐藤 私は高校がすごく嫌いだったので、大学には期待して入学しました。でも1年生のとき、通学が大変だったこともあって単位を落としてしまいました。それが2年生になってゼミに入り「ゼミって楽しいな」と思い、真面目に大学に来るようになった記憶があります。

司会 皆さん、どうやってゼミを選んだの?

大館 僕は車が好きなこともあり、板垣先生のご専門の自動車の経済史が「なにこれ面白そうじゃん」と思って選びました。

佐藤 私は1年生のときに「大貝ゼミ、ガチゼミだよ」と情報が流れてきたんです。そういうのがけっこう好きなので（笑）、ガチゼミという噂で決めました。



佐藤 かなえさん
大貝ゼミ
地域経済学科 2017年卒
サービス業

小野 僕も大貝ゼミですが、先生だけじゃなくて先輩も後輩もガチ。居心地のいいガチゼミという感じでした。

木村 熱中できる場所が大学にあるというのが新鮮でした。僕はずっとバスケットボールをやってきて、高校まで熱中していました。正直、大学の授業は90分がただ過ぎるのを待っている状態だったんですが、ゼミは一つのものに向かっていく感じが部活動のようで熱中できた。地域研修もすごく良かったです。

頭を動かし、体で考える

小野 地域研修は本当にしんどかった。企業訪問では自分たちでアポをとってヒアリ

ングしなければならないのが、ガチゼミと言われる所以かもしれない。

佐藤 社長に質問するときも「全員が発言しろ」みたいな雰囲気だね。

大館 板垣ゼミは穏やかでしたね。

石井 のんびりだったよね。私は編入するときに「ゼミはどこに入りますか?」と聞かれたけど、事前情報がなにもなかったので、ゼミ紹介を読んで板垣ゼミを選びました。4、5人くらいでチームを組んで、経済の世界で起きていることを議題に討論を行っていました。

大館 板垣ゼミでは、自分の意見に対して相手がどう反応するか、自分の押し付け合いにならないように相手にどう説明するか、というロジカルな部分で鍛えてもらったと感じます。

司会 ゼミや授業のどんなところが記憶に残っていますか?

佐藤 強烈に覚えているのは、毎年、釧路公立大学で行われている学生研究発表会「SCAN（スキャン）」です。いろんな大学の学生が集まる報告会で、地域研修の発表を行うんですが、前日ギリギリまで準備して、寝ていない状態で発表に臨まなければならないのが本当に辛かった。私のチームだけ賞をもらえなかったけど、みんなで頑張った記憶が今でも残っています。そして、自分で限界を決めないでやり続けることが大事だなと思いました。

小野 うちの代は、3年生全員で地域研修に行ったのがすごく楽しかった。ヒアリングや先生とディスカッションできたことなど、強烈に記憶に残っています。



小野 翔大さん
大貝ゼミ
経済学科 2018年卒
食品流通業

木村 自分は、1週間くらい天売島へ行き、学生が主体となって地域で行うプロジェクトを考える「地域協働フィールドワーク」に参加したことです。最後にイベントをやるという話だったんですが、島の人とうま



参照：「地域研修」とは
 *地域研修は教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、現地研修を行う実践的な科目。「地域協働フィールドワーク」はNEWS 2を参照。

写真は学生時代のゼミ、地域研修

くコミュニケーションが取れてなくて、島の人にガチ説教されました。みんなでアセって「どうしよう、いかだを作って脱出するしかない！」(笑)。次の日は朝4時半から漁師のバイトがあるから寝ないとならない、イベントの話し合いもしないといけない、と極限状態で、結局、寝坊してまた怒られて。生きる力をつけてもらいました(笑)。

大館 それに比べると、経済学科は教室での学問の色合いが強いかもしれない。地域経済学科は地域研修など実際に現場へ行くことが多いし、頭を動かすが、体を使うかに近いものがありますね。



大館 俊介さん
 板垣ゼミ
 経済学科 2017年卒
 建設コンサルタント

社会に出て力となる、学生での経験

司会 では、社会に出てから学生時代の経験が生きたことはある？

石井 営業では、商材を郵便局で扱ってもらうために、道内の半分以上の郵便局を巡りました。局長とお会いするのですが、自分で経済に関する勉強もされている。そのような方々と話すとき、経済学の話で相手の懐に入り込むことができました。

小野 私も食品流通の営業で、相手は基本的に農家の方。生産者であり経営者なので、10人いたら10人も異なる経営をされています。私の仕事は農産物を買付けると、それに対する農薬や肥料、資材を売ること。それぞれの生産者に合わせた柔軟な対応が求められます。3年生のときに行った新潟県・燕三条の金属加工の職人さんたちの「俺のやり方はこれだ！」というのに、生産者も近いものがある。「この人はこういうやり方だから、こういうアプローチをしよう」と考えられるのは、ゼミでの経験が生きているのではないかと感じます。

木村 ゼミでは、アンテナを張ってチャンスに飛びつき、そこにお金と労力をかけることを厭わないという経験ができました。社会に出ても、何事にもフットワーク軽く取り組むことができる大きな力になっていると思います。

大館 学生のときはリーダーとか面倒くさいことは誰もやりたがらないじゃないですか。でも、自分からゼミ長をやってよかつ

た。会社でプロジェクトが立ち上がってリーダーを決めるときに、「誰もやらないなら自分がやります」と手を挙げやすくなりました。積極性という言い方は好きではないですが、やらないとわからないことはいっぱいある。学生は失敗してもいいんだから、人まかせにせず、どんどんやってみてほしいと思います。

佐藤 ゼミではいろいろな企業の社長にお会いして、さまざまな価値観を学びました。相手の価値観を理解し尊重した上で話をすることを、学生のときに学べて良かったです。そしてSCANの体験から学んだ「自分で限界を決めないこと」は、まわりが無理だと言っても「まだできるはずだから、やり方を考えよう」と進めることができ、社会に出て働く中でもすごく大事だと思いました。

学生時代は基礎体力をつける期間

司会 最後に、自身の経験を踏まえた上で、学生時代にやっておいたほうがいいことは？



木村 時間があるうちに、自分のためになるような経験に投資するのは大事だと思います。たとえば、旅に出ること。自分が学生のときは、フランスにいた大貝先生に卒業旅行で会いに行きました。

小野 新聞や専門書、参考書、小説などなんでもいいので活字に触れてほしい。今は仕事に関する話でも「ネットで見た」「SNSで見た」ということが多くて、部下に「その情報のソースはどこ？なに新聞？」と聞いても「ネットで見たのでわかりません」と答える。営業なので、お客様と話すときに、本当に信用に足る情報なのかを確かめないといけない。「そのお客様に対して、君が会社の代表になるんだよ。だから確実性のある情報や文章を読んでね」と言っています。実は、私は学生時代に全然本を読まなかったの、社会に出てから苦労しました。学生のうちからしっかり本を読む習慣をつけておくと、社会に出てから役立ちます。

佐藤 私は2つあります。1つは、人とのつながりをたくさん作っておくこと。つながった人の価値観が理解できると、自分の可能性や思考もかなり広がります。たとえば、自分が悩んだり辛かったりしたとき「あの人はこういう考え方を持っていたな」と、自分とは違う視点で物事を見ることができる。自分の心を強くするという意味でも、学生のうちにさまざまな人からさまざまな価値観を学んだほうがいいと、今でも感じています。

2つ目は、あまり先のことを考えず今を一生懸命頑張っておくこと。私は考えすぎて就活がうまくいかず、正直、今の会社は本当に入りたかったところではなかった。でも、目の前のことを頑張っていたら、認めてくれる人がいたり、新しいことに挑戦する環境を与えてくれたりしました。今に注力することは、絶対先につながります。

石井 私は編入前に、読んでほしい本としてリストアップされていた、先生方が選んだ15冊を真面目に読みました。その中から8冊くらい手元にあって、今でも時々読み返します。のちのち経済学を振り返ることができる楽しみがあるので、ぜひそれらの本を読んでみてほしいです。

大館 自分の発言や行動を相手はどう受け取るか、考える習慣をつけること。社会人になると考えなければならぬ場面がたくさんあります。1年生でも4年生でも、考える習慣はつけていったほうがいいと思います。

司会 社会に出てからも勉強し続けなくてはいけないから、基礎体力だけはつけとけ、ということですね。それから結局、他人との関係の中に自分自身があるわけで、つねに相手のことも考えるし自分のことも考える必要がある、ということかな。

では皆さん、それぞれ仕事が忙しいなか集まっていたいただき、ありがとうございました。



本学経済学部の卒業生をお迎えし、経験から得られた知見を講義していただくフロンティア講座が、基礎ゼミナールにおいて開催されました。

1部では、株式会社ミナトの猿田京平さんをお招きしました。猿田さんは自身の会社で手がける合併・買収(M&A)の実例や、社会経済学基礎や労働経済論の内容がキャリアに役立ったと語りました。教科書だけでなく地域研修等を通じて、現実社会を知る重要性も伝えてくれました。

2部では、環境省の香川謹吾さんをお招きして、「観光業界の経験と、そこから見えた社会の変化」と題した講演が行われました。旅行業界で長く勤務された後、国家公務員へ転身された経験をもとに、観光業界の内情や展望・課題、北海道における観光の将来性について話題が提供されました。(上園・比嘉)



写真上2枚：1部フロンティア講座、講師の猿田京平さん



写真左2枚：2部フロンティア講座、講師の香川謹吾さん

034 OG訪問 働きウーマン



ゼミでたくさんのチャンスを得て、その経験が今の仕事の土台になっています。

●地域活性化との出会いとNPO活動での経験

私の学生時代の大きな転機は、大貝ゼミに入ったことだと思います。ゼミの研究テーマが「地域経済の活性化」で、ゼミの一環で携わったご当地グルメのイベントをきっかけに、「別海町」と「地域活性化」について興味を持ちました。

そんな時、友人から別海町の町議会議員がインターンシップを受け入れてくださるという話を聞き、ぜひ現地で地域振興と地方議員の役割を学んでみたいと思い参加しました。議員の仕事に直接触れて、政治が身近になったと同時に、ゼミのテーマである地域活性化の現場を知ることができ、と



東洋株式会社 食ベレア事業部 係長

本間 怜奈さん

ほんま れいな

でも良い経験になりました。

その経験を「他の学生にもしてもらいたい」と思い、議員インターンを支援するNPO法人の学生運営スタッフになりました。全国の大学生や目上の方々と一緒に活動する中で、コミュニケーションの取り方など、社会経験を積むことができたと思います。



写真左：ドットジェイビーの学生スタッフとしての活動で。写真上：議員インターン参加時、インターン先の議員とご家族、インターン生仲間と。その他の写真：学生時代、地域研修で訪れた十勝地方や、高知県四万十町で

近年、北海道関連の報道は凄惨な事件などネガティブなものが多く、われわれ道民は陰々滅々とした日々を送っている。そうした中で、2023年2月に東京都に本社を置く半導体メーカーであるラピダスが第一工場の建設地を千歳市に決定し、2025年の試作ライン完成および2027年の量産開始に向けた準備を着々と進めていることは、数少ない朗話である。雇用や付加価値の創出などラピダスの進出がもたらす経済効果は、間接的なものも含め莫大なものとなるとの試算も出されており、その実現が切望される。

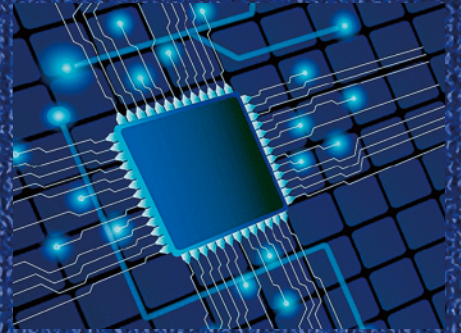
日本の半導体は、超LSI技術研究組合を中心とした国家プロジェクトが功を奏し、1980年代半ばに世界を席卷した。しかし、劣勢に立たされた米国からの規格や市場シェアなどにかんする要求に従わざるを得なくなった結果、勢いが失われていった。日本が得意としていたのがDRAM（記憶保持動作が必要な随時書き込み読みメモリ）であったことも失速の一因であったとの指摘もある。同製品の比較的単純な構造は、低コスト生産に強みを持つ韓国や台湾などの新興国・地域企業との競合を必然とするものであったからだ。

社会の情報化・デジタル化のスピードに拍車がかかり、半導体の重要性は高まり続けている。それは「産業のコメ」と呼ばれるに相応しいものとなり、半導体の生産力が自国の経済力を大きく左右する重要な要素となっている。米中貿易摩擦、および新型コロナウイルス感染拡大によるサプライチェーンの混乱などで半導体不足に直面した苦い経験もあって日本製半導体復権への国民の渴望感が高まっており、ラピダスへの期待は大きくなるばかりだ。

ラピダスが目指すのは世界最先端のロジック半導体の開発・製造であるため、「技術」や「高度人材」が成否のカギとなる。そこで

地元の大学には基礎研究に加え、人材育成体制の高度化と人材輩出の面で貢献が期待されている。2023年6月、北海道経済産業局が主体となって半導体産業に関わる人材育成を目的とした組織「北海道半導体人材育成等推進協議会」が発足した（本学もそのメンバーに名を連ねている）。他方、2024年6月に北海道大学は半導体の研究教育連携を台湾の陽明交通大学と締結した。世界に後れをとっている立場からすれば、こうした国外の資源を活用しながら技術や人材を創出する動きは合理的である。

グローバル化時代における地域経済の成長については、これまで「既存の地域資源をいかに活用するか」に大きな関心が向けられてきたとの印象が強い。たとえば地域資源のブランド化・差別化を進めて世界で「競争」という成長モデルが描かれてきた。しかし、「新しい地域資源をいかに創造するか」が問われる中で外国・地域と手を組みながらその課題を克服していくこと、すなわち「共創」もグローバル化時代における地域経済の重要な成長経路であることを上の対外連携の例が示している。これら二つの「きょうそう」に上手く取り組んでいけるかどうか、北海道経済の持続的成長のための大きな政策課題となっている。



●濃密で充実した時間だった、ゼミでの活動

大学時代に学んだことは、NPO法人での活動のほか、大貝ゼミでの経験が大部分を占めています。それくらい自分にとってはゼミの存在が大きく、充実した濃い時間だったと思います。

地域活性化や6次産業化、中小企業が地域経済に与える影響を研究し、地域研修で2年次は十勝地方、3年次は高知県四万十町へ行きました。どの地域にもさまざまな課題があり、それを解決するため意欲的に活動する人がいて、地域活性化について自分なりの結論を持たせたような気がします。そこに住む人たちが、どれだけ地域に愛着を持って「このまちをもっと良くしていきたい」と思えるかどうか、そういうことがすごく大切だと感じました。



●新しい部署で地域に貢献

就職活動はわりと苦戦したほうで、周りの友人は春から夏前に決まっていたのですが、私が内定をもらったのは秋です。4年次の前半はまだNPO法人の活動が楽しく、就活に身が入っていなかったかもしれません。友人たちを見て焦りはじめ、興味のある企業をいくつか受けていくうちに、「地域活性化に貢献したい」という自分の思いが明確になり、東洋株式会社で募集していた「プランナー」という仕事にも魅力を感じて入社につながりました。

入社後は5年ほどプランナーとして企業や自治体のホームペー

ジ、印刷物などの企画、進行管理を担当し、3年前に社内で「地域活性化事業部」という部署ができることになって、「これこそ私のやりたかったことだ!」と思いました。ちょうどタイミング良く異動が決まり、生産者の商品ブランディングや自治体のSNS導入支援など、本社のある帯広・十勝を中心に、いろいろな地域に貢献する業務に携わりました。

その後、以前から自社で運営していたECサイトをリニューアルし、各地のグルメを直販する「食ベレア北海道」をオープンしました。事業部名は変わりましたが、係長として引き続き通販業務全般とマネジメントを担当しています。最近では、高校での出前授業で講師を務めたり、さっぽろオータムフェストにブースを出店するなど、実店舗での販売にも取り組んでいます。

現在の仕事は、各地の生産者や企業を支援することです。大貝ゼミで地域に飛び込み、さまざまな経験をしたことが今の仕事の土台になっています。特に、ドラッカーが提唱する「マーケティング」と「イノベーション」の重要性を実感しており、これらを地域活性化に活かすことが私の使命だと考えています。

大学のゼミは、多くの成長機会を与えてくれる貴重な場所です。これから大学で学ぶ皆さん、特にゼミに参加する皆さんには、ぜひ積極的にチャンスをつかみ、自身の可能性を広げていただきたいです。



食ベレア
Taberare 北海道
<https://www.taberare.com/>



●1994年生まれ、北海道札幌北陵高等学校出身。2016年3月、本学経済学部地域経済学科を卒業後、印刷やWebサイト制作などを行う東洋株式会社に入社。プランナー職を経て、2021年から食のECサイト「食ベレア北海道」を担当。



図書館・図書館学 課程への誘い

研究室の 窓から



北口己津子 地域経済学科 きたぐち みつこ 教授

<略歴>

【担当科目：図書館概論など】

大学図書館、公共図書館非常勤勤務、尚綱大学短期大学部幼児教育学科専任講師、山形県立大学法人山形県立米沢女子短期大学国語国文学科准教授を経て、2024年より現職。

専門

図書館学。児童サービス論を中心に公共図書館と学校図書館の連携についても調査を進めている。

本文中の引用文献

- 1) 北口己津子「リモート読み聞かせの実践と課題～米沢女子短大学生による取り組みを中心に～」米沢国語国文学第49号、2021、p.97-107
- 2) 岡本真「場としての図書館の実空間から情報空間に橋を架ける -デジタル資源カードという提案-」図書館雑誌12月号、通巻1213号、p.米沢国語国文学第49号、2024、p.696-698
- 3) S. R. ランガナタン著、森耕一監訳、図書館学の五法則、日本図書館協会、1981、425p

お勧めの本

佐藤翔著「図書館を学問する：なぜ図書館の本棚はいっぱいにならないのか」青弓社 2024年発行
図書館に対する素朴な疑問に対してデータをもとに分かり易く解説された本です。興味を深めてくれる1冊です。



「図書館という「場」について

皆さんの身近にある「図書館」はどのような「場」になっているのでしょうか？ここでの、「図書館」という場合、おもに公共図書館についてとします。私にとって図書館との出会いで、覚えているのは、親に読み聞かせをしてもらっていたことです。手持ちの絵本には限りがある中で、連れてってもらった図書館で、沢山の絵本を選び放題の自由にわくわくしたものです。もちろんお気に入りが見つければ、本屋で購入してもらおうというおまけつきで、ますます本が好きになりました。ですので、その当時の私にとっては、「自由に沢山の資料を選べる場」ということになります。

「立地が良い場」にある来館型図書館の例

現在の図書館に見られる特徴は、一昔前の「自由に沢山の資料を選べる場」ということに留まらない「利便性」の追求があります。「立地が良い場」に図書館をつくるという傾向がみられることです。

2023年から2024年にかけて見学に行ったことのある図書館を例に見てみましょう。

1) 岐阜県可見市にある「カニミライブ図書館」2023年11月オープン。ここでは運営



*写真は那須塩原図書館みるる（3枚共）写真右…書架に大きく本の一文が表示。写真左…展示サインに実際の子ども服を利用。写真上…館内に喫煙コーナー
2023年3月3日著者撮影

は市が主体となり、図書館の分館扱いで行っています。株式会社良品計画は商業施設にある無印良品店舗内を場所貸しし、什器等のデザインを担当しています。図書館で従来行われている資料の並べ方（十進分類）を採用していないところは、従来の図書館に慣れている人にとっては、使用しにくい部分もあるようです。しかし、商業施設内の無印良品店舗内にある図書館のため、日ごろ図書館を利用していない層が買い物ついでに図書館を利用をする「可能性」が考えられる点で意義があります。

NEWS 2

地域協働フィールドワーク2024 2024年11月14日

学生が住民の方々とともに地域の可能性を探る実践型の地域協働フィールドワークは9年目を迎えました。これは経済学部単位として認められる活動で、参加学生は2年計画で地域と関わります。

今年も6月（2泊3日）と8月（6泊7日）、羽幌町・天売島で実施され、2年生～4年生の7名が参加しました。天売島は人口300人弱の島で、漁業と観光が主力産業ですが、夜あいている飲食店がなく、人々が集う拠点がありません。そこで、①島の交流スペースで学生手づくりの「居酒屋てん」を設営し、島民も観光客も学生も交流できる場をつくりました。ただ、メニュー考案・仕入れ・容器調達・宣伝などを学生だけでは果たせず、島の方々がお手伝い

くださり、おかげで宅配まで実施できました。

今年は、②学生にも島の方々にも思い出になることを願って、島の方々や学生の様子を収めたアルバムを作製し、2016年から今年度までの活動写真を収録しました。また、③「天売島おらが島活性化会議」のお三方にインタビューし、天売島の雰囲気、活動内容、今後の課題などを伺いました。さらに、④「何でも隊」と称して、旅館の掃除、漁師さんの手伝い、自販機の補充などの活動や、⑤保育園で暑さ対策の耐熱シートを窓に貼る作業や掃除などをお手伝いし、園児に読み聞かせをおこないました。来年度も島の方々との協働を通して地域活性化を探究します。（水野）



ただし一企業との連携になりますので、図書館の継続性という面では、もし企業が撤退したらどうなるか？など課題もあります。

2) 栃木県那須塩原市にある「那須塩原市図書館みるる」2020年9月オープン。この図書館の立地はJR黒磯駅前徒歩2分です。駅に近いということで、地元住民はもちろん、旅行者にも利用される可能性があります。図書館内には、地元の材料を使用した、ソフトクリームも販売されている点でも、地元住民に留まらない魅力があります。またただ本が並べられているだけでなく、本のフレーズが書架に大きく貼り付けてあったり、実際の子ども服がそこに置かれている本のサインになっていたりと書架の展示にも今までの図書館のイメージを覆す工夫がされています。

この2つの図書館は、ショッピングのつ



いでであったり、本以外の喫茶が目的であったりなど、その場に行くことを目的とする図書館です。

一方でコロナ禍での図書館は、利用者が行きたくとも行動制限のため、行けない場所に一時なっていました。非来館型のサービスとして、デジタル資料に力をいれる図書館も増えました。それまで対面でしか考えられなかった、読み聞かせさえ、リモートでも行われました。私もゼミの一環で行っていた近隣の学童への読み聞かせをコロナ禍においては、リモートで行いました。¹⁾

今後の図書館、来館型？非来館型？

図書館は、今後益々非来館型のサービスに特化していくのでしょうか？いずれそうなる可能性もあるかもしれません。しかしまずは、紙資料とデジタル資料の両方の良さを活かした場となることが考えられます。その1つの試みとして岡本氏²⁾は書架に「デジタル資源カード」と呼ぶ、「インターネット上に存在する役立つ情報資源の存在を伝える印やサインを置く」ことを提唱されています。すなわち図書館の棚にそのサインを設置し、紙資料とデジタル資料の両方の利用を利用者に誘う試みを紹介されています。

インドの図書館学者ランガナタンは『図書館学の五法則³⁾』として、図書館の基本的目標を以下5項目の法則と示しました。第1法則 図書は利用するためのものである。第2法則 いずれの読者にもすべ

て、その人の図書を。第3法則 いずれの図書にもすべて、その読者を。第4法則 図書館利用者の時間を節約せよ。第5法則 図書館は成長する有機体である。その中で、「第5法則 図書館は成長する有機体である」という法則は、図書館が未来に向けて“こうでなくてはならない姿”から常に自由であるという点で、未来志向であり、今後図書館はどのような場になっていくのかは未知数です。

図書館・図書館学課程への誘い

このように図書館とは、興味深い場であることは、間違いありませんが、一方司書の資格取得は、資格が直接就職に結びつかない部分もあります。ただし、本が好き、そして人が好き、その2つを結び付けたいと考えている人には、図書館全般に関する授業や司書資格はとても魅力的なものになります。

また図書館学課程は、主専攻にプラスして受講するものですので、ハードなものになります。司書資格の授業の1つである分類の授業では、学問体系の全体像を学ぶことにもなります。沢山の図書を図書館に並べるといことは、全ての学問体系が「分けられてそこに存在する」ということです。主専攻以外の視点を図書館学課程を通して持てるということは、学際的な視点の育成に最適ともいえます。

なにはともあれ、まずは身近な図書館を訪ねてみませんか？

NEWS 3

2024年度地域研修報告会を開催

2024年12月18・20・23日

2024年度の地域研修報告会は、2024年12月18日（水）、20日（金）、23日（月）の3日間の日程で開催されました。同報告会は経済学部の「地域研修Ⅰ・Ⅱ」の一環として毎年実施するもので、今年度は32グループが研修の成果を披露してくれました（うち5グループは他の日に開催）。

コロナ禍明けの昨年度に引き続き、今年度も充実した地域研修を行うことができました。学生は道内外に足を運び、実際に見て、聞いて、触れて、地域の社会・経済・文化の多様な姿かたちと、それぞれに個性豊かな地域づくりの実践について見聞を広げました。道内の研修先は、足元の札幌市のほか、室蘭市、帯広市、釧路市などの主要都市、そして数多くの農山漁村というように多岐にわたり

ます。また、福島県、兵庫県、鳥取県など、道外に飛び出し、学びを深めたゼミナールもみられました。

地域研修の実施方法は年々工夫が重ねられています。例えば、地元の方々と一緒に活動しながら地域調査に取り組む「参加型」が根付きつつあります。地域研修報告会は、個々の地域の実情を知る場としてだけでなく、こうした地域調査の在り方を巡る新たな知見やノウハウを共有する場にもなっているようです。

今回の地域研修報告会を通して得た知見は、次年度の地域研修のバージョンアップにつながるに違いありません。と同時に、地域研修の集大成として、一人でも多くの学生が卒業研究に踏み出すことを願っています。（早尻）





NEWS 4

1部・2部 基礎ゼミプレゼンテーション大会を開催 2024年12月13・20日・2025年1月11日

12月13・20日に、金曜日に基礎ゼミを行っている複数の基礎ゼミナールによるプレゼン大会が開催されました。5ゼミ計15グループが、それぞれに練り上げてきたプレゼンテーションを披露していました。中学高校での部活動、SNSがはらむリスク、消費税増税の影響、ジェンダーなど、テーマは多岐に及びました。グループ内でのコミュニケーションを取りながら、基礎ゼミを通じて学んだ資料収集はじめ、グラフやパワーポイント作成の成果が発揮されていたように思います。大勢の人の前での発表はとても緊張するものですが、報告者は堂々と発表し、それに対してフロアからも多角的な視

点で質問やコメントが出されていたことが印象的でした。

強いて欲を言うのであれば、基本的な情報を収集してそれをまとめて終わる、のではなく、自分たちで設定したテーマに言及している他の論者の主張や、テーマに対する「世間」一般のステレオタイプな視点に対して、もっと批判的な検討があっても良かったのではないかと思います。些細なことに対しても「なぜ？」の疑問を持っていくことが、学問的探究の出発点です。次年度以降のゼミ活動を通じて、学びを深めてもらいたいと思います。(大貝)



NEWS 5

'24'25 就職活動について

二つのスケジュール

あなたは公務員志望でしょうか、それとも民間企業への就職を目指しているのでしょうか。大学入学前から決めている人もいるかもしれませんが、最近なんとなく考え始めた人、今の時点ではどちらか一方に決められないという人もいるかもしれません。ここでは、皆さんのキャリアサポートの一環として、公務員を目指す場合と民間企業就職を目指す場合に分けて、本学の一般的なスケジュールをご紹介します。

【民間企業への就職を目指す場合】

- 2年生が終わる3月：学内就職ガイダンスに参加。
- 3年生 春：自己分析や業界研究を開始。インターンシップの情報収集。
- 3年生 夏：インターンシップに参加し、実際の業務を体験。
- 3年生 秋以降：エントリーシート提出や面接準備。会社説明会に参加。
- 3年生が終わる3月：エントリーシート提出本格化。採用選考スタート。

民間企業を目指す場合、インターンシップや説明会に参加し、企業理解を深めることが重要です。また、自己分析を通じて自分の強みや興味を明確にし、自分がマッチする業界・職種を見極めることも重要です。



写真は2024年11月8日の業界研究会

【公務員を目指す場合】

- 2年生 秋：2年生対象の公務員ガイダンスに参加。公務員試験の内容を理解し、試験科目の勉強をスタートさせる。
- 3年生 4月：本格的な試験対策を開始。学内で受講可能な公務員講座に参加(有料)。
- 3年生 夏：集中的に試験勉強に励む。
- 3年生 冬：各種公務員模擬試験の受験。
- 4年生 春以降：一次試験、二次試験、面接に進む。面接・小論文対策ガイダンス、模擬面接をキャリア支援センターが実施。

公務員試験は範囲が広いので、計画的にコツコツ勉強を進めることが重要です。また、自己PRや志望動機をしっかりと練る必要があります。

二つのスケジュールは大きく異なりますが、どちらの場合でも後悔せぬよう早め早めに考えて動いてください。(歌代)

